

---

# 永久の闇と朧月

Black Rabbit

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永久の闇と朧月

### 【Nコード】

N2806Z

### 【作者名】

Black Rabbit

### 【あらすじ】

とある神と悪魔が一つの世界を滅ぼした。その数百年後、長閑で平凡な村に、一人の少年が生まれる。その少年は災厄と罵られ、両親に裏切られ、その末路が……。「ゾンビだよ！生きてねえけど文句あるか!？」

新たに加わった英雄の子供を弟子にし、昼の護衛を任せとりあえず頑張って生きてみる物語。

「師匠、とりあえず目的は復讐だったはずなんですけど…?」

この作品は不定期更新です。暇つぶしに読んでもらえると嬉しいです。

出来るだけ早く更新するので、どうぞよろしくお願いします。

## プロローグ く神と悪魔く（前書き）

前作の続きが全然思い浮かばず、気分転換に新しいのを書いたらなぜかスラスラ書けてしまったので、投稿したいと思います。

恐ろしく駄文ですが、暇つぶしにどうぞ。

## プロローグ く神と悪魔く

そこは全ての存在を超越した者のみが存在<sup>い</sup>することの許される世界。  
その名も神界<sup>ムンドゥス・デイ</sup>……。

そこには2人の男が対峙していた。  
片方は苦しそうに顔を青くしている。もう片方は飄々<sup>ひょうひょう</sup>とした態度で  
その苦しそうな顔をした男を見ている。

金髪の とてつもない美青年な 苦しそうな顔をした男が、  
重々しく口を開け言葉を紡ごうとする。しかし男の口からは声がな  
かなか出ない。動きもどこかぎこちなく、まるで空から糸で吊るさ  
れた操り人形<sup>マリオンネット</sup>のようだ……。  
やっと、といった風に金髪の青年が口を開き、もう片方の こ  
れまたとてつもない美青年な 黒髪の男に言った。

「……………ごめん。」

「

悲痛な表情でそう告げた青年に、黒髪の青年は

「いいさ。別に……………でも、まさか俺とお前が殺しあうことになる  
なんてな。ついさっきまでは考えてもなかったぜ？ククツ……」

そう言って、嗤<sup>わい</sup>う。笑うではなく、嗤<sup>わい</sup>う。確かに笑ってはいるが、  
目は全く笑っていないからだ。その体から迸<sup>はな</sup>る殺気は、まるでさっ  
きまでの飄々とした態度が嘘のようだ。

「……………ごめん。僕がもっとしっかりしていれば…こんなことにはならなかったはず、だ」

その言葉にまた金髪の青年は謝る。

しかし、黒髪の青年は

「だから良いって。どうせ今更だろ。まあ、いつかはこうなるんだろうなあ、とか思ってたし。別に予想外でもなんでもないさ…。…  
……………でも、恐らく俺の魂は呪われちまうんだろうな。  
クハハ……………」

そう言つて、自嘲気味に笑い。天を仰ぐ。

天には無数の星が瞬いていた。この世界は人間が住む世界とは次元ディスケが違うが、それでも天には星がある。それは同じことだった。

金髪の青年はこの世界において最強の神だった。そして黒髪の青年はこの世界において最凶の悪魔だった。2人は親友だった。5000年前に出会つて、戦つてお互いを認め合った好敵手ライバルでもある。その2人が今、一つの世界で、何一つ無い世界で…対峙している。

「……………」

金髪の青年は黒髪の青年と同じように天を見上げる。  
変わらず絶えず流れ星がたくさん流れていた。

「……………はあ。こうしても仕方ない、か。さっさと終わらせようぜ。お前も……………死ぬ、いや…消える覚悟は出来てるんだろ?」

黒髪の青年はそう金髪の青年に問いかける。

「……………ああ」

問われた青年は、短く答える。

「なら、おしゃべりもこの辺にしとこうぜ。これ以上話すと……………お前を斬ることが出来なくなっちまいそうだからな…」

そう言っつて、またクハハと笑う。

今度は本当におかしそうに、まるでこれから殺し合いをするとは思えない青年の…普通の笑いだった。

「……………世界が消える。僕達が争うことで」

しかし、金髪の青年は笑わない。

顔に悲痛な表情を貼り付けて、決して笑うことはない。

「そうだな。……………最強神を殺したとなっっちゃ俺の魂はとんでもない呪いをつけるだろうな…。来世の俺は苦労しそうだ……………あ、そうだ。今のうちに贈り物<sup>ギフト</sup>を用意しておくか！」

しかし、そんな表情の神を無視して、悪魔は色々と構築を開始する。神はそれを黙って見ていた。

「……………終わった？」

やがて手を止めた黒髪の青年に金髪の少年は問いかける。

「…ん？ああ、終わった。これで来世の俺も頑張ってくれるといいんだがね」

少し遠い目をしながら答える黒髪の青年。

「さてと、殺り合おうか」

そう呟いた悪魔から凄まじい殺気が放たれる。

しかし、神は気にも止めない。手を無造作に振る。すると、そこから無数の電撃が生み出される。普段の神はそんな力は無かったはずだが、悪魔が贈り物を作成している間に力を溜めていたのだ。悪魔はそれを全て叩き落とす……………。

長い、長い戦「くわいあいが始まった。

もういつから戦っていたのか…。そんなことは全く分からなくなるくらい戦い続けた2人。それはもしかすれば、1分程かもしれないし、1時間程かも…もしかすれば1年程戦っていたかもしれない。地形はガタガタに変形していた。

すでに体は両方ともボロボロで、それでも2人は全く衰えなかった。

「ク、ハハ!……………」

黒髪の青年は、口の端から血を流しながらもニヤリと歪ませながら嗤った。

「……………つ……………」



対する金髪の青年の腹は真っ赤に染まっていた。  
斬り裂いたのだ。悪魔が神を

「世界は、変わるぜ？これ、で下界のほうも、変わるだろうよ。……ま、人間共はバカ、だからなあ。どうせ殺し、あつたりするんだろ、俺とお前みたいに、な」

息を切らしながら、それでも言葉を紡ぐ悪魔。

やがて、2人の姿がぼつと崩れてきた。これは悪魔の使った最凶の能力。  
使用者と対象者を確実に消し飛ばす技。空間さえもが歪み、これからこの世界がどうなるのか……なんてことは全くわからない。それでも黒髪の青年は使ったのだ。親友の呪いを止めるために

「……………今まで楽しかったぜ。最ツ高にな！だから悔いは無え……ただまあ、来世のヤツには申し訳ないが……こればかりはどうしようもなかったしな……………」

黒髪の青年は消え行く体を見つめながら、目の前にいる金髪の青年に呟いた。

「……………つ……………僕も、だよ。……………本当に……本当に今まで楽しかった。……………僕が呪いなんてかからなければ……………！」

涙を流しながら、金髪の青年は拳を握り締め、俯きながら悔やむ。

「まあ、そのことについては仕方ないだろ。さて、もう時間もないお互い消えるんだ……やっぱ最後は笑って悔いのないように消えないと」

「……………そう、だね」

黒髪の青年が笑顔でそう言い、金髪の青年はうなずき、涙を拭く。

「じゃあな、今まで世話になったぜ。ありがとな、神様しんがみ」

「今までありがとう、きっとまた一緒に笑える日が来ると思うから  
…それまでさようなら。じゃあね悪魔しんゆう」

2人は最高の笑顔でそう言い放った。

「世界は終わる。この一撃で」

2人は同時に今までの最高出力を右腕に込め…全力で走り出す

！！

その力がぶつかり合った瞬間、黒と白の衝撃波が世界を覆いつくし  
……………世界は崩壊した。

## ブログ「神と悪魔」(後書き)

とりあえずは、しばらくこっちの小説を更新していきたいと思います。

…とは言っても、前作をやめるわけではないので、そちらもよろしくお願いします。

もちろんこちらもよろしく願います。  
誤字等ございましたらお気軽にご報告を

感想、評価、お待ちしております

**異常な俺は粗末な扱い（前書き）**

とりあえずここから物語スタートって感じですね

プロローグはまだあまり関係ないような感じだと思います。

今日中に2話投稿しますので、駄文ですがよろしくお願いします。

## 異常な俺は粗末な扱い

この世界……かつて最強の神と最凶の悪魔が滅び、何の変哲もない世界に魔術という存在が生まれた。

人類は理を覆す魔術という存在を研究し尽くした。しかし、分からないことが多すぎて実験を繰り返している状況だった。そう、過去の過去形なのだ。なぜなら……愚かな人類はその魔術という力を戦争に利用しようとしたのだ。

そしてそれに対抗するために、他の国もメキメキと魔術の力を伸ばしていき……戦争が終わったのは、人類がほぼ滅び、人口は10000分の1にまで減り、人類の住める土地は4分の1になった後だった。その他は魔力による汚染で、瘴気が起こり、動物は魔獣へ、無機物は魔物へ、そして人類は亜人へと変化：いや、進化してしまふ状況だ。瘴気に犯されたモノは一部を除き、凶暴化する。

だからこそ危険地区とされている汚染された大地へは誰も入ることはないのだ。

人間は魔術という力で、危険生物と戦うので精一杯の世界へと変化してしまっただった。

それから何百年経った世界にて

物語は再び動き出そう

としていた…。

長閑な感じのする村。

ちよつと魔術師が多いだけ

とは言っても3人しかいない

の何の変哲もない村。

そこが俺、影月かげつき 朧おぼろの生まれた村だ。

そして、俺が今いる場所は：真つ暗な場所、固くて冷たい地面、そして目の前の鉄格子…。

まあそこまで言えば誰だつてわかるだろうが、答えは牢屋だ。

しかも地下牢。

ここに入れられたのは：確か4年程前だったと思う。

なんでも黒髪を持った俺は『災厄』の象徴なんだとさ、そんなだけで俺をここに閉じ込めてるわけ…でもなさそうだ。

むしろ黒髪よりもヤバイモノを俺は持つてる。それは…：…魔眼だ。俺の右目には魔眼があるのだ。しかし、この目は色々と危険なので、包帯と長く伸ばした前髪で隠している。

「……………そういや俺って色々とおかしかったよなあ」

そう、今思えば俺は色々と規格外だった。

現在の年齢は9歳だが、他の子供ガキとは違う。と自分でも感じていた。なぜなら、俺の自我は生まれた瞬間から存在していたから…。まるで、知らない赤子に『自分』という存在がとり憑いたような感覚だ。しかも、知識面の記憶ならなぜかたくさん持っている。…なぜこんなにおかしな思考をしているのかは全くわからない。人間の汚いところをずつと見てきたからだろうか…？

「あ、お兄ちゃん。ご飯持ってきたよ」

「んお？」

そんな思考にハマっていたら、鉄格子の向こう側から聞こえたのほほんとした声。

顔を向けると、そこにはなんとも可愛らしい少女がいるではないかまあ、俺の妹だけどさ……。茶髪の長い髪を左右の中央でまとめ、両肩に掛かる長さまで垂らした髪型……。つまりはツインテール。そして、金色の瞳を持っている可愛い系の美少女だ。血が繋がってるとは到底思えない……。

「おお、明日香<sup>あすか</sup>。いつもありがとな」

俺が日頃の感謝を述べると、明日香はいつも通りの笑顔を見せて

「いいよ。だって家族じゃない」

と言った。まだ7歳のはずなのに……。俺みたいにおかしいはずじゃないのに……。なぜこんなに賢いのか……。だいたい俺のことを家族と言ってくれるヤツはこの世界でお前だけだよ……。

「全くもって出来た子だな」

そう言って、俺は明日香に近づこうとする……。しかし……。バチッ！という音で見えない壁のようなモノに弾かれた。明日香の悲鳴が上がるが、無視して前に進む。その瞬間……

「クズがッ！汚らわしい手でその娘<sup>こ</sup>に触れるな！」

鉄格子に手をかけた瞬間、誰かにその手を蹴り飛ばされ、後ろに倒

れこむ俺。

その姿に、明日香の悲鳴がもう一度響き…

「やめてください！あの人は私の兄なんですよ！？」

と声を荒げた。しかし、明日香の近くにいたのであろう男は動じず

「しかしヤツは罪人です。本来なら貴女がここに来ることなど出来ないのです。ヤツが何をするのか分かりませんので、近づくことは許されません」

と正論をぶちかましゃがった。

「……………お兄ちゃん……………」

辛そうに俯く明日香。というよりは辛いのだろう。俺の魔眼はウソを見抜く効果もあるのだ。

しかし、今までは何もしてこなかったが、やっぱり近づくとダメなわけか。

分かったことだが、触れられないのは少し…辛いモノがある。

それにしても思いつきり蹴ってくれやがって、このクソ野郎……………。

「クズはクズらしく家畜のエサでも食ってる」

ムカツク男はそう言い捨てると、明日香を連れて牢屋を出て行ってしまふ。

「……………ぐすっ……………ま、また来るから……………」

明日香もそう言って泣きながら出て行ってしまった。



他人の為に泣けるとは…なんとも良い娘だな……………。

とたんに静まり返る地下牢。まあ、普通は騒がしいはずがないのだが、俺はいそいそと飯に近寄り、本当に家畜のエサのようなモノを食べる。……………まずい。相変わらず…しかしもう慣れたので問題ない。

食い終わると…

「……………ふう」

今まで溜めていた息を全て吐き出し、深呼吸をする。相変わらずまずい空気だ。しかしそれも慣れた。俺は今、ある計画を立てている。自由の取得…。つまりはここからの脱出、逃亡だ。

慕ってくれている妹には申し訳ないが、10歳の誕生日を迎えると同時にこの村を出よう。そう考えている。そのための力はすでに手に入れた。

さっきの見えない壁の対処法もすでに実践済みだ。

10歳の誕生日を迎えるまで…後4日ある。

「とりあえず、それまでは練習かな」

何の？と聞かれたら普通に魔術の練習だ。としか答えられない。

それと…少しだけ『魔眼』デスレアーチオを使いこなすための訓練だな。

よし、開始しようか。

カーズド・ワールド  
呪われた大地という呼び方が存在する危険地区にもっとも近いこの村で、呪われた少年が計画を実行するまで

後4日。

**異常な俺は粗末な扱い（後書き）**

誤字等ございましたらお気軽にご報告を

感想、評価、お待ちしております

## 異常な俺は盗賊と戦う（前書き）

前作が行き詰っている間に、割と書き溜めてしまっていた。（と言ってもそこまですくないんですけど）ということなんで、最初のほうは割りと早い投稿だと思います。

駄文ですが、暇つぶしにどうぞ

## 異常な俺は盗賊と戦う

あれから3日が経った。明日はついに脱出計画を実行する日だ。魔術の使い方も完璧だ。万が一でも脱出に失敗することはないだろう。

そうになったら暇になった……。ということまでこの3日間の話でもするとしようかね。

ムカツク男に俺が蹴り飛ばされた日の次の日、明日香は言った通りにここに来た。

しかし後ろにはいつものようにあのクソ野郎がいて、俺をすごい睨みつけてる。

そのせいか明日香は大した話もせず、上に登って行ってしまった。

「……………筋トレでもするか」

ということで腕立て1000回、腹筋2000回、壁蹴り500回と暇つぶしに筋トレをしていた。

そのおかげか、幼い俺の体は余分な脂肪は一切なく、引き締まった体付きになっている。

まあ、やることになかったから4年前から始めただけなんだけどね、魔術も同じ理由だ。

魔術については魔眼の『透視』を使い、暇つぶしに村長の家にあつた何百もの本を読んでいたら魔術という存在を知っただけだ。

しかし魔眼を使うと、莫大な魔力を消費する。魔術を知った今だから言えるが、この魔眼の使用時に使う魔力は最低でも上級魔術10発分だ。上級魔術というのは、使用するための魔力が凄まじすぎて1人1発使えるヤツがいるかどうか。といったところだ。

……………俺がどれだけ異常なのかが良く分かったと思うが、それはまたの話にする。

その日はその後魔術の訓練をして、そのまま寝た。

その次の日もそのまた次の日もほとんど変わらない日常をすごしていった。

残念ながら明日香との雰囲気はまだに直っていないのは残念だ。

結局、もう少しで村<sup>こ</sup>出る予定だしなあ…。とか思った。

そして今に至る。

「つか雰囲気悪いまま出てったほうがいいんじゃない？そのほうが簡単に忘れられるだろうし」

という考えに至った。よし、冷たく反応しておくとしようかな。アイツが俺のことなんて忘れて幸せに過ごしてくれるとうれしいね。…まあ、ちょっと悲しくもある。兄として、な…。

今日も明日香がやってきた。やっぱり雰囲気は変わらず、このまま脱出まで上手くいけばいいなあ…なんて思った俺がバカだった。だってそんなことを思ったら、何か起こることは確実だったのだ。

そろそろ出るか…日付の変更と同時にスタートするか、と思って準備をしていた時だった。

この村では、日が変わる時に教会の鐘が鳴る。だからそれを合図にして出て行こうと思っていたのだ。

しかし簡単にはいかないのが人生ってヤツだったみたいだ。なんだか外が騒がしいなあ…とか思っている

「と、盗賊だああああ！ジーンさんがやられちゃったあああああああ…！」

という大声が聞こえた。

ジーンというのは、この村に住んでいる実力がそこそこある魔術師だったはずだ。

「……………」

やってられない…。なぜ、このタイミングで…と思っていたが、よく考えればチャンスだ。今のうちに外に出て、盗賊騒ぎの間に逃げ出せばいいや。などと考えていた時だった。

「きゃあああああああああ…！」

悲鳴。そう悲鳴だ。しかし、どうでもいいのだ。ただの村人の悲鳴

なら、俺は全く気にしない。……でもアイツは違う。いつも俺を慕ってくれたし、きつとアイツがいなければ、俺はとっくの昔に狂っていただろう……。

その悲鳴は明日香のモノだった。

聞き間違えるはずもない。そんなことありえるはずがない。だって毎日聞いていた声なのだから……誰も近づかないここに唯一来ようとする物好きの声なのだから……。

「……………はあ……………行くしかねえ、か」

なんだかんだでお人好しだな。俺って……今初めて知ったぜ。

この混乱で逃げちまえばいいのに……。そう思っている自分がいないこともなかったが、無理やり押さえつけて俺は右手を突き出す。

俺が右手に魔力をこめると、目の前に魔方陣が描かれる。

「……………どっ、せい！」

俺は見えない壁に向かって魔術を発動する。もちろん無詠唱だ。本当は隠密のためだったんだが、今はそんなこと関係ないから……。

発動させた魔術の名は『テイ・スベル解呪』。

こめた魔力の量よりも対象の魔術にこめられた魔力が少なければ、問答無用に打ち消してしまふ強力な魔術だ。下級の魔術だが、俺はどの魔術よりも使えると思う。

解呪により、目の前の見えない壁が跡形もなく消え去る。

「……………」

俺は走り出す。

目指すはクソツタレな盗賊だ。ムカツクしな、明日香に手をかけるとは……ぶち殺し確定だぜ。

俺は地下から村に繋がる道を駆け出した。

騒ぎの場所へたどり着くと、盗賊のリーダーっぽいヤツが明日香の腕を掴んでいる。

よく見ると、俺を蹴飛ばしたクソ野郎が近くで下っ端にボコボコにされたのか、顔を赤く腫れ上がらせ気絶していた。…もしかしたら死んでるかもしれないが、俺にとっちゃどうでもいい。気になるのは明日香だけだ。とりあえず俺のすべきことは魔術師が登場するまで時間を稼ぐ…またはその間に明日香を救出することだ。どっちにせよ…簡単だな。

「コイツ、売り飛ばしちまいましょう。これほどの上玉だ、高く売れますぜ」

「ああ、そうだな。いや、その前に俺達で味見でもするか？くつくつく」

下卑た盗賊共の笑い声で、明日香は泣いていた。

味見って…意味は分かるが、コイツらは7歳児の子に一体何をしようというのだろうか…？

全くこれだからアホは困るぜ…。

ちよつとムカついて、俺は思いつきり地面を殴った。もちろん魔術込みで

次の瞬間、バガンツ！という音を立てて地面が吹き飛んだ。



やりすぎた。なんて思っただけからな！……ウソだ。確実にやりすぎた。まさかこんなに脆いとは思わなかった。その勢いで包帯が吹き飛んじまつたじゃねえか……どんだけだ。

「な、なんだデメエは！」

盗賊の1人が俺に気付いたのか。声を張り上げて叫ぶ。

「……………何って…災厄だよ」

俺が冗談半分にそういうと、盗賊共は顔を真っ青にさせ「か、髪が黒…。」「黒い髪…災厄」などと呟き始めた。

正直ちよつとショック。まさか盗賊にまで知られているとは思わなかった。

盗賊が知ってるってことは他のどこもそうなんだろうなあ。と思い、ちよつとガツクリ。これからはローブでも買う必要があるそうだ。

「くっ！所詮はガキ1人だ！ぶっ殺しちまえ！！」

リーダーは他の盗賊共にそう叫んだ。当然の如く下っ端共はこっちに向かって来なかった。

なぜか？それは、俺が魔眼を発動させたからだ。

魔眼の力の1つ、『操作』。

俺は盗賊の下っ端の1人を操り、リーダーを真っ先に殺した。

そのせいか、他の盗賊はパニックに陥る。もちろんこれが狙いだ。

盗賊共がパニックに陥っている隙に、俺は明日香を抱えるようにして抱き上げ、走り出した。……遠くから魔術師　俺の両親だ  
が　がやってくるのが見えた。

俺は明日香を下ろし、とりあえず盗賊をあつ2人に任せて、逃げ出

すとするかな〜なんて思っていた。だから気付くことが出来なかったのだ。

魔術師が打ち出した炎の龍は…盗賊ではなく俺に向かってきたということに…………。

完全に油断していた。まさか俺に向かって打ってくるとは思わなかったからだ。明日香の顔も驚愕に満ちていた。しかし、もう時すでに遅し…炎の龍は目の前まで迫っていた。

本当に咄嗟に、無詠唱で障壁を作り出した。しかし、炎の龍の威力は即興の盾など軽々く突破し、俺の右手に被弾した。

「あぐ、！？ぎいあああああああああ！！！！」

焼ける。腕が…生きたまま。

気が飛びそうな痛みをなんとか堪え、魔術で火を消し、全力で走り出す。

後ろから明日香の悲鳴が聞こえた。

しかし、それに構っているほどの余裕は、今の俺にはなかった。必死で逃げ出し、近くの森に飛び込んだ。

真っ暗な森は傷ついた俺をあざ笑うかのようにザワめいていた。

**異常な俺は盗賊と戦う（後書き）**

誤字等ございましたらお気軽にご報告を

感想、評価、お待ちしております

異常な俺は死に絶える(前書き)

少し強引な展開だったような気がします。気がしますが、気にしません。ハイ

駄文ですが、暇つぶしにどうぞ

## 異常な俺は死に絶える

「……………あ、くっ…はあはあ。く、はは。やってくれる  
じゃねえの。あのクソ親……………」

俺は真つ暗な森の中で火の籠　プロミネンスだっけ？　を  
打ってきた母親に悪態をついていた。しかし、今考えてみればそう  
だ。俺は魔眼で盗賊を操りパニックに陥らせた。

恐らく向こうも俺が人を操る力を持っていることを知ったんだと思  
う。だから、狂ったアイツらの考えは、俺が盗賊を操り盗賊に村を  
襲わせたのではないか？という考えだったんだと思う。

本当、頭おかしい。そんなことをするくらいなら、村人を直に操っ  
てるぜ。まあ…後悔しても今更遅いけどな…ボヤいても仕方ないこ  
とだ。と思考を切り捨てた。その瞬間

「ッ！？…う、おお！？」

「がはっ！」

足を滑らせ、ゴロゴロと山道を落ち、途中にあつた木に激突したみ  
たいだ。

背中に激痛が走る。肺の空気が全て外へ強制的に吐き出された。口  
の中を切ったのか、僅かに血が混ざった唾液を吐き捨てる。

「痛っ……………クッソ……………あの両親クソどものせいで、俺の計画が台無し  
だ！」

激痛を堪え、立ち上がった。

そして一番下までなんとか降りる。とりあえずどうしたもんか…右手はもうダメそうだから今のうちに斬りおとすか…？などと考えていると、左から恐ろしい速度で何か飛んできた。

反射的に顔を右にズラしたが、避けきれずに頬が深く抉<sup>えぐ</sup>られた。だが体が麻痺しているのか、痛みはほぼと言って良いほど感じなかった。

何が…？と見てみると、それは

「……………爪？」

そう、爪だ。クマの爪のような……………

<グギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！>

そうそう。こんな感じの……………

「ってデカすぎんだろ！つかなんでクマがここに！？」

と言ったはいいが、ここは森なんだから居てもおかしくないことに気付いた。

しかもコイツは見たことがある。確か村長の家にあつた本に書いてあつた魔獣だつたと思う。

確か名前は…『マリッジベアー』だつたと思う。危険度はなかなか高いらしい。

こつちには武器もないし、もう少なくなつた魔力は無駄遣いすることは許されない…つまりは

「素手で戦うか、一か八かで逃げるか……………」



クマはその一撃でブチ切れたみたいで、今までよりも凄まじく早い突進を繰り出してきた。

そして、一瞬で目の前は真っ赤に染まった……。しかし、それは俺の血や殴られた衝撃とか、そういうものではなかった。

その赤は途轍とてつもない熱を持っていた。つまりは、炎。いや、焔。

一体どこから…？と思ったが、その炎が消えた後にはクマは消し炭になっていて

「……………助かった…のか……………？」

まだ油断は出来ない。だが、何者かの攻撃でクマは死んだのだ。

だから今が逃げるとき、あの両親があんな巨大な焔を撃てると思わないが、念のためだ。

しかし、俺は逃げられなかった。なぜなら……………

<グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

！……………！>

巨大な咆哮が耳に痛いほど鳴り響く、その巨大な音に、思わず俺は耳を塞いだ。

そして咆哮の聞こえた上空へ目を向けると……………

「……………は？」

思わずそう言ってしまった。そして笑ってしまった。なぜなら、あの強力な焔も巨大な咆哮も…全てヤツがやったのだと分かったから…。

俺が見上げた上空には、5 m程の巨大な竜が羽ばたいていた。



「……………マジかよ」

状況は限りなく最悪に近い。

クソ…コイツに素手で勝つなんて…100%無理だ。そして逃げることも100%無理…。

つまり勝つには武器　それも魔剣や聖剣　を使うか、魔術

最上級魔術　を使うしかない。

しかし正直言つて、最上級魔術を発動させても勝てる気がしない。つまり勝つ方法は俺にはたった一つ。

それは……………今ある全ての魔力を注ぎ込んで、魔眼を使うことだ。

「……………どっちにしても死ぬかもな、でもまあ…やらねえよりはやっただほうがいいだろ」

俺はそう言つて、右目に魔力を注ぎ込む。最上級魔術5発分程の魔力を　魔眼、『死滅』に使う。そして、白目の部分が漆黒に染まり、魔眼が効果を発揮し始める。

「　　っあ……………!!」

右目に激痛。左手で右目を抑える。しかし、痛みが引くことはない……………。  
だが、その痛みは確実に竜にダメージを与えていた。

くグギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!



恐る恐る左目に触れる…いや、触れようとした。しかし、触れることが出来なかった。

なぜなら、俺の左目には、何かが刺さっていたからだ。ブシュツと刺さっていたモノを抜いた。

それを魔眼の状態で見ると、竜の鱗であることが分かった。

恐らく、尻尾を振り回した時に剥がれて飛んできたのだろう…。全くついていない。

失血で意識が遠のく、魔眼の副作用で視界が闇に閉ざされた。

「……………く……………っそ……………。。死……………ん……………だか」

言葉にならない音を口から発し、俺の意識は途切れた。

**異常な俺は死に絶える(後書き)**

誤字脱字ございましたら、ご報告お願い致します。

評価、感想、お待ちしております。

**異常な俺は埋葬される(前書き)**

今回は妹、明日香視点の話です

駄文ですが、暇つぶしにどうぞ

## 異常な俺は埋葬される

私は信じられなかった。

3日前、お兄ちゃんは初めて私に触れようとした。でも、いつも地下牢の前にいる番人に阻まれてしまった。……私は知ってる、お兄ちゃんは何も悪いことなんてしてないってことを……。

でも誰一人お兄ちゃんに近づこうとしない……そう、お父さんとお母さんまで……。

あの時、お兄ちゃんが番人の人に蹴られたとき、私は気がつけば怒鳴っていた。でも、結局私は何も出来なかった。それが悔しくて、お兄ちゃんに向ける顔なんてないって思ってた。

でも、そのままじゃいけないって思って、今日お兄ちゃんに謝りに行こうと思っていた。そんな矢先　　盗賊が村を襲ってきたことが分かった。

村の人たちは皆、ジーンさんがやられたって言うた。

ジーンさんはこの村の門番をしている人で、この村では私の両親を除く魔術師だった。そして両親と仲が良かったせいか、私もよく可愛がってもらっていた。

そんな人がやられた　　。それは少なからず私にショックを与えていたんだと思う。

でも、それよりもショックだったのは　　。

「クソッ！あの災厄のガキのせいか!？」

「そうに決まってる！クソ！あのガキ…さつさと殺せばよかったのに！」

そう言ってる村の皆だった。

災厄のガキ……言うまでもない、お兄ちゃんのことだ。

盗賊をお兄ちゃんがどうやってここに連れてくると言うのか…。自分達で地下牢（じかろう）に閉じ込めたくせに……。

私は行き場のない怒りを感じたが、今はそんなことに怒ってる場合じゃないのだ。それをどうにか押さえつけ、地下牢の入り口までついた……が。

ガシツと誰かに腕を掴まれた。

「ッ!？」

「おお！コイツは上玉じゃねえか。まだガキだが…躡（しゅう）けりやいい女（メス）になるんじゃないのか？」

「いいな、よし、ソイツ連れて来い」

「よっしゃー！とりあえず上玉は連れて来い。高く売れるからな！」

盗賊だった。

私は気がつけば捕まっていた。地下牢の門番の人は、もうボロボロで地面に転がっていた。

怖い…。そう思った。顎が震える。顔が真っ青になる。涙が滲む。

「い、いやあ！離して！いやだ！怖い！やめてえ!!」

気がつけば私は叫んでいた。

しかし、盗賊達はその様子をニヤニヤと笑って見ているだけだった。

「誰か、誰かあ！いやあ…助けてえ。やめっ…痛っ！」

パン！と鋭い音が私の頬を打った。

一瞬何が起こったのか分からなかったが、痛みで我慢していた涙腺が崩壊し始める。

「う……………ぐすっ……………いやあ……………ふえええええええ……………」

「うるせえぞ！静かにしろ！」

パン！という音がもう一度鳴り響く。

頭がおかしくなりそうだった。なんで？どうして？私がこんな目にあってるの？

分からなかった。ただ…ただ、私はお兄ちゃんに謝りたかっただけなのに……………。

「……………助けて、お兄ちゃん」

私は小声で呟いた。でも、来るはずがない。お兄ちゃんはまだ、あの牢獄の中にいるのだから……………。

もしかしたら、これが罰なのかもしれない。苦しんでいるお兄ちゃんに何もすることが出来なかった私への…。

そう考えたら、自然と恐怖心は薄れていった。どんどん思考が自虐的になっていく……………。

バガアンツ！！

突然、凄まじい音が鳴り響いた。

盗賊達が動きを止める。



土煙が晴れたそこに立っていたのは……………

病的に白い肌。顔の半分を覆い隠すほどの長い前髪、私と同じ金色の目…そして、どこか闇を連想させる漆黒の黒髪。

見間違えるはずもない、毎日ずっと会いに行っていた。

私の兄、影月 朧がそこに立っていた。

私は今見ている光景が信じられなかった。

なぜ、地下牢から出てこれたのか。なぜ、そんなに怒った顔をしているのか…。凍るように、でも血のように真っ赤なその右目は一体なんなのか…

「な、なんだテメエは!？」

沈黙に耐えられなくなったのか。1人の盗賊が叫んだ。  
すると…

「……………何って…災厄だよ」

そう言っつて、お兄ちゃんはニヤリと笑った。

その後、チラリとこっちを見て、声を出さずに呟いたような気がした。

「(そこで待ってる。今すぐ助けてやる)」

もしかしたら聞き間違えかもしれない。

でも、やっぱり私を救ってくれるのはこの人なんだ。と、そう本気で思った。

「くっ！所詮はガキ1人だ！ぶっ殺しちまえ！」

リーダーみたいな男が叫んだ。

でも結果は私の予想を遥かに超えていた。

突然盗賊達が仲間割れし始めたのだ。……………モフツ、という感触がいきなり当たったせいで、思わず「え？」と言ってしまった。

気がつけば、抱えられていたのだ。お兄ちゃんに…。

「お兄ちゃん!？」

「(もう少し経てば、魔術師2人が来るだろ。そこまで待っててくれ)」

優しく囁かれたその言葉に、私はうなづくことしか出来なかった。

あわてて顔を逸らした先に見えたのは2つの人影だった。

見ただけで分かった。あれは両親だ。

助かった…。私は完全にそう思っていた。でも、両親が打ち出した炎の龍のようなモノは

「え!？」

お兄ちゃんに直撃した。

私の頭にはいくつもの疑問符が浮かんでいる、なんで?どうして?そう思った。

それはお兄ちゃんも同じのようで、目を大きく見開いてお父さんとお母さんを見ていた。が、すぐに叫び声を上げて、村の外に走り出してしまった。

……………信じられない。お兄ちゃんは私を助けただけだった。それなのに……………。

私が呆然としているうちに盗賊は全員拘束されていた。

「だ、大丈夫!?!どこにも怪我ない!?!もう大丈夫だから、ね」

「このバカ！心配かけさせやがって！」

気がつけば、両親が私に抱きついていてた。

でも今の私は空っぽだった。2人の言ってることが理解出来なかった。

なんで2人共お兄ちゃんに炎の龍を当てといて私の心配をしてるの…？

なんで誰も村の外に走っていったお兄ちゃんを追いかけないの…？  
なんで私はこんなところで両親に抱きつかれているの…？

そんな暇はないはずだ。

気がつけば、私は2人を突き飛ばしていた。2人の顔が驚愕に歪む。

「なんで…なんでお兄ちゃんを誰も心配しないの！？なんで親子なのに魔術を…」

「違うわ！アレは人間じゃない。貴女に兄なんていない…。アレは化物よ」

「そうだ。アイツは化物…葬り去られなければならない災厄の遺物だ……………」

違う。

お兄ちゃんは人間だ。少なくとも…地下牢に入れられて悲しみ、妹を盗賊に襲われて怒り、両親に魔術を打たれて絶望する…そんな人間だ。

「あの化物…呪われた大地のほうに走ってっただぞ！」

「そうか…なら追いかける必要はないか。勝手にくたばるだろう」

その言葉を聞いた私は、気がつけば駆け出していた。向かうのはお兄ちゃんの向かった森…。

危険な魔獣や魔物が出るから近寄ってはいけないと言われていたこの森…。でも、今の私にそんなことは関係なかった。無我夢中で走る。後ろから誰かが追いかけてきてる気がしたけど、そんなことお構いなしで走り出した。

走っている途中、魔獣の咆哮が聞こえた。

お兄ちゃんだ。そう思って疑わなかった。私は音のしたほうに向かって走り出した。

「……………そ、んな」

私は信じられない光景を目にした。

もがき苦しみ、空中で暴れている巨大な龍。そして、その近くで血塗れになり膝をついてるお兄ちゃんが私の視界には写っていた。

「きゃあ!?!」

私は悲鳴を上げた。なぜなら、私の近くに折れた木が飛んできたからだ。

龍は痛みで発狂し…滅茶苦茶に尻尾を振り回し始めたのだ。

それは周りの木々をなぎ倒し…強風を生み出し

その尻

尾はお兄ちゃんを直撃した。

私が悲鳴を上げる暇もなかった。

ベキユツという鈍い音が鳴り響き、轟音を立てて　　ボールのよ  
うに　　吹き飛んでいった。そして、その後も龍は尻尾でお兄ち  
やんの体を滅多打ちにして　　。

そして兄の体は、ピクリとも動かなくなってしまった。

その瞬間

<グオオオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアア！！！！！>

龍は断末魔の叫びを上げて、地面に落ちた。

ズドオン！という凄まじい音を立てて落ちたソレは、生きてるのか  
死んでるのは分からなかったが、とりあえず動かなくなったのは  
分かった。

私はお兄ちゃんが吹き飛んでいったところへ走った。

そこで見たのは……………

「……………うつ！？」

それを見た瞬間、思わず私は吐き出してしまった。胃の中のモノが  
全て無くなるまで……………。

それほど、お兄ちゃんの体に起こっている状況はひどかった。

顔は何かに挟られたのか、左目の下から左耳の下まで大きく切り裂  
かれ、左目自体に何かが縦に突き刺さったような痕<sup>あと</sup>があり、そして  
体は、腸がはみ出て、その腸でさえズタズタに切り裂かれている。

右腕は、肩口からはキレイすっぱりなくなっていて…とところどころ  
から肋骨か何かが砕けた状況で突き出ていた。左手を触ってみると  
…もつすでに凍りついた体温だった……………。

「……………あ」

死んだ。そう思った。

昨日…いや、今日の昼まで一緒にしゃべっていたのに…。  
声にならない。涙腺が緩み、涙が零れ落ちた。私は理解出来なかつた。

なぜこんなことになってるのだろうか…。自分の無力をこれほど呪った日はなかった。

「どう、えぐっ…し、て…ひつく、う…なんで…ぐすっ」

ポタポタと私の目から零れ落ちた透明な雫は…傷のついた少年の頬に落ちる。

その瞬間…日付が変わる教会の鐘がなった。

そして思い出す。今日は6月6日…お兄ちゃんの誕生日だ。

私は瞳から零れ落ちる雫を堪えることが出来なかった。お兄ちゃんの胸にもたれかかり、声を出して泣いた。

どれくらい泣いていただろうか。涙は枯れ果て、悲しみも幾分かマシになった。

この声で魔獣が寄ってきたとしても…別に構わない、と私はそう思った。

「お墓…立ててあげるから」

私が立てなければ、お兄ちゃんという存在は誰の心にも残ってくれないだろう。

だから、ここに私は墓を立てる。

一心不乱に私は…墓穴を掘り続けた。爪が割れても、捲れても、気にしないで彫り続けた…。

夜空には綺麗な満月が煌きらめいていた。

**異常な俺は埋葬される（後書き）**

ということ、やっと主人公が死ぬまでの話を全部書けました。

誤字脱字ございましたら、どうぞ気軽に報告よろしくお願いします。

感想、評価、お気に入り、お待ちしております^^



異常な俺は蘇る(前書き)

駄文ですが、暇つぶしにとつづゝゝ

## 異常な俺は蘇る

「…はあ、はあ、はあ…っ！」

私は走り続けていた。

暗い森の中を…何が何でも死ぬわけにはいかなかったから…。

この子を死なせるわけにはいかないから！

私と…あの人の間に生まれた子供。絶対に死なせるわけにはいかない。

「はっ、はっ、はあっ……………きゃ！」

ドスン！

足元にあつた何かで躓いたらしい…。それでも止まるわけにはいかない。

絶対に

「…はあ、はあ、はあ……………逃げ…、きつた……………？」

気がつけば、後ろには誰もいなかった。

でも無我夢中で逃げてきたからか、ここがどこなのか…全く分からなかった。

分からなかったが、とりあえず守ることは出来た。私、木桜 奈央  
と…英雄、真の子供、光を。

「……………痛っ！」

安心したら、足の傷が痛みを増してきた。

裸足で走り続けたせいで、ところどころ切り傷があり、場所によっては穴が開いてる場所もあった。

痛みが増してきた足を引きずりながら、丁度いい高さにあった石（岩？）を掴んで、その場に座り込む。消毒がしたかったのだが、水もないし薬草もない。

なので我慢しなければ…。

しかし、痛いモノは痛いし、人間なんだからお腹が減ってきた。

光はまだスヤスヤと寝ているが、起きた時に大泣きすることは確実だろう。そのためにはご飯が必要なのだが……………。

「……………暗くてよく分からないですね」

とりあえずは眠ることにした。

しかし気付いてしまった。私が寄りかかっているのは…パツと見、墓だった。

つまりこの苔むした石は…墓石……………？

でもこんなところで死ぬ人に墓を作る人なんて……………。そんなことを考えていると……………

「オギャアアアア！オギャアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ッ！？」

光が夜泣きを開始した。

びっくりした…。そう思いながら、私は光を宥める<sup>なだ</sup>。

ようやく落ち着いていた…。そう思ったのも束の間…。

ウウオオオオオオン……………

という音が後ろから聞こえてきた。

恐る恐るそちらを見ると、暗い森の中で、ギンギンに光る赤い目を発見した。

恐らくオオカミだろうと思い、追ひ払おうとした。

しかし……………

<ククク…ウマソウナ、ニンゲン、ダ>

<ヤワラカ、ソウナ、ニク、ダ、>

<コロシテ、クウ、ト、シヨウ>

片言ながら喋りだすオオカミたち。

そこでやつと気付いた。この森の魔力の流れが異常だということ…

ここが呪われた大地だということに……………。

殺される…私はそう思った。呪われた大地は魔獣や魔物が永遠とわに生産される。そして、その魔獣や魔物はどれも人間が住んでいるところに出てくるモノよりも凄まじく強力なのだ。

身を竦ませて震えることしか出来なかった私に、オオカミたちは容赦なく襲いかかってきた。

しかしその瞬間

<ギユ！？ガギヤアアアアアアアア！？>

飛び掛つてきたオオカミ3匹が急に空中で動きを止めた。

本当に急だった。私はなぜオオカミたちが空中で止まったのか…いや、なぜオオカミが宙に浮くことが出来るのかが謎だった。

しかし、近づいてみて分かった。

オオカミたちは、地面から伸びた黒いモノに突き刺されていた。

グボツ……………

急に地面が盛り上がる…私は驚きで体が動かなかった。

地面から出てきたのは…病的な白い肌に、黒みがかつた白い髪が特徴的な10歳くらいの少年だった。

髪の毛は地面につくんじゃないだろうか？というくらい長い。

正直に言えば、私は見惚れていたのだ。地面から出てきた…私の命を救ってくれた少年に……………。

少年はゆっくりとこちらを振り返り

俺は、夢を見ていた。

「よう、起きたか？」

目の前には…『俺』がいた。

つやのある漆黒の髪、右目の魔眼、左目の金色の瞳…間違っはずもない、『俺』だった。

「ははは、混乱すんのも無理はねえな。まあ、安心しろ。俺はお前

の敵じゃないし……つか、お前自身って言うてもおかしくない……。むしろ俺が本体オリジナルでお前は劣化品レプリカなんだけどな」

……俺が……お前の劣化品だと？

「ああ。まあ、おかしいとは思ってただろ？生まれたときから意識があり、災厄と罵られ……結局は死んだ……。そんな散々な人生なのさ。呪われた俺達の運命なんてのはな」

……。

「でも安心しろ。俺はすでに終わったからな、これからはお前の時代なんだ。だから最後に、お前に本体オリジナルの力を渡しに来た」

本体の……力、だと？

「そ、お前がそんな苦労する人生を送ったのは……ま、俺が原因なんだわ。ちよつとしたことで魂を呪われちゃってね。まあ心配すんな、俺がお前を再構築リメイクしてやるよ。もう体は死んだみたいだから……  
……弄いじるにはもってこいだ」

……。

「大丈夫さ。心配はいらねえよ、悪いようにはしねえ。そんなもつて、今魂とのズレを直した。どうだ？気分は……？」

……悪くない。いや、なんだかパズルがピッタリハマったみたいな感覚だ。

「よしよし、それのおかげで今まで使えなかった魔術も簡単に構成

出来るだろうよ。それで筋肉とかも…よし、完成。これで俺とほぼ同じ姿だな。それで今こそ贈り物ギフトを送るときだな」

贈り物？

「そそ、贈り物は3つあるんだわ。まず1つ目が、俺の力…『不死身』だな」

不死身？

「おう、死なくなる。老けもしない。不変ってヤツさ。何も変わらない…ま、実際は色々と変わるけどな…。」

滅茶苦茶だろ……………。

「まあ気にすんな。それで2つ目は】だ」

……………？なんだ？今なんて…

「聞き取れないか。まだお前には早いつてことだな」

……………おい、使えるモン寄せよ……………。

「ま、いつかは使えるから大丈夫だ。さて、最後は…【?????】だな」

……………。……………。……………。

「この能力は異常だ。でも弱点はある…それはな、日、火、灯だ」

…完全夜行性かよ。というより、また聞き取れなかったんだが…

「そうだな。夜行性というか、夜じゃないと何も出来ないと思うぜ？」

……………無視か…。

「くくつ…ま、頑張れや。俺の出番はもう終了だ。死んだお前を復活させるのが本当の贈り物だったんだがな、割と時間があつたからちよいと遊んじまった…そういや、ここは時空がおかしくなってるから…早く戻らないと困った状況になるかもしれんな」

それを先に言え。……………じゃあな、なんだかんだで蘇らせてくれてありがとな。

「いって…元は俺のせいだし。向こうで会う元神様にもよろしくな」

……………？……………元神様？

「『閉じる』」

。お、おい。ちよっと待て元神様って

ガチャリ

扉が閉じた。

そこにはすでに俺の姿は見えない。



だからこそ、アイツが消えてから……ポツリと呟く。

「強くなれよ。これからお前はすげえ苦勞をするだろうからな。決して負けないように、強くなれ。もう一度出会うまで、何人にも敗なんびとま  
けぬような勝者になれ」

扉が閉じた。

もう『俺』の姿は見えない。

気がつけば目の前が真っ暗だ。ここどこだ？体が動かない……わけじやないが、なんだか重い……。

……感觸的に土みたいだ。

埋まってるのか？俺……まあいいか。さっさと出るとしよう。  
魔術『影』トッセルを発動。……すげえ。生前の1000倍はあるだろう  
絶對的な魔力だ。

思いつきりに腕を振り上げた。

ガシユっという音が響いた。何だ？と思いつながら土から這い出る。  
すると、オオカミがバラバラになって倒れていて……そして、こ  
ちちを見て驚愕している、ボロボロの服を着た美人のお姉さんと眠  
っている赤子がいた。

「……………」

なんだか、口を開く気が出ない。

無気力。これが復活した代償かもしれないと、その時思った。  
そして、黒かった髪が灰色のような白になっていた。生前の傷も全  
部残ってるみたいだ。  
なんだか……感情が消えたみたいだな。驚きも悲しみも怒りも…  
何も感じない。

「……………あ、あの……………」

俺がお姉さんのほづをずっと見ていると、お姉さんのほづが話し  
けてきた。

「な、なんで……………土から？」

「……………」

さて、なんと答えよう。

選択肢1：蘇ったんだ。……………頭の正常を疑われるな

選択肢2：土が好きなんだ。……………こっちだってなかなか頭おか  
しい

選択肢3：寝てたら埋まってた。……………どうしてこう  
なっ  
た

もういいや、無視しよ。答えるのも億劫だ。……………ん、今日は満月か

「……………？」

お姉さんは俺が空を仰いだのを見て、つられて空を見上げる。

「わああ……………満月……………綺麗ですね」

「……………」

お姉さんの言葉に、俺は無言で肯定を示す。

「あのう……………ここで一体何をしてたんですか…?」

黙っている俺に向かって再び質問してきたお姉さん。

「……………住んでた」

とりあえずウソを言うしておく

「ッ!?……………住んでるんですか!?この危険地域に…!?」

「……………ああ」

大げさに驚くお姉さんに頷いて答える。

「……………あの、お願いがあるんですけど……………」

オズオズ…といったようすで聞いてくるお姉さん。

「……………?」

「一緒に住まわせてもらえないでしょうか?」

……………予想外事態発生。どうしたものか…ウソで言ったのに本気にしてくれやがった上、一緒に住みませんか?って……………ちよつと警戒が足りないような気もするが…。

「……………別にいいか」

まあ、問題ないや。とりあえず、色々と聞きたいことがあるしね…。  
今がいつなのかさえ、今の俺には分からんから…。とりあえず分かって  
ることは、龍との戦闘の痕がなくなるくらいに年月は経ってる  
ってことだ…。まあ、今なら分かるけど、ここは呪われた大地って  
呼ばれてたところだったのか。魔力の流れがちょっと異常だ。

これからのことを考えると、憂鬱になってくる。

結局妹はどうしてるんだろうな。等と考えていると、自然とため息  
が出た。

## 異常な俺は蘇る（後書き）

駄文ですが、これからもよろしくお願いします。  
誤字等ございましたらお気軽にご報告を

感想、評価、お待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2806z/>

---

永久の闇と朧月

2011年12月11日09時50分発行